剥がして残す。

水のメディウム

透明水彩での表現を、より個性的にするメディウムがある。それが、マスキングインク。まずこのインクで描き、乾いたあとで描画する。乾燥後インク部分を剥がすとそこだけきれいな白抜きとなって残るのだ。もちろん描画した上に使ってみる手もある。他にも、絵具を自作したり、美しい滲みを作ったり、タッチを変えたり、光沢を与えたり。そういう新しいテクニックが新しい作風を生み、やがて水彩の世界は大きく拡がっていくだろう。お近くの画材店で、手にしてほしい。<ホルベイン水彩用メディウムシリーズ>

holbein

www.holbein-works.co.jp

ホルベイン工業株式会社　東京都豊島区東池袋2-18-4 TEL.03(3983)9251　大阪府東大阪市上小阪1-3-20 TEL.06(6723)1554

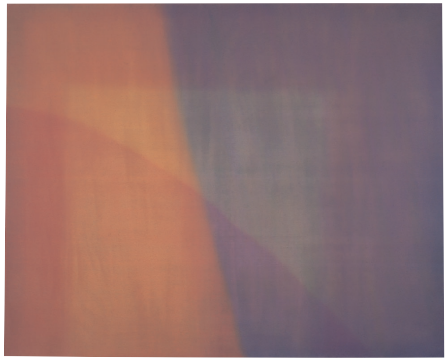
holbein

根岸芳郎

「未知への旅」を誘う色の水

横山勝彦＝文　森田兼次＝写真［＊］

1974年、留学先のアメリカ、ボストンにて。後ろは当時暮らしていたアパートメント。街にはベトナム戦争末期の疲労感が漂っていた



Untitled 1980-1　1980　キャンバスにアクリル絵具　170×210cm
作家蔵　＊
西武美術館「Art Today '80 絵画の問題――ロマンティックなものをこえて」展（企画・藤枝晃雄、1980年11月15日―12月17日）に出品

1980 「マスキングを使っていた制作方法から脱却して、新たな空間が生まれてきました」

新宿駅から特急で2時間20分、諏訪湖沿岸の小都市・岡谷に住む根岸芳郎を訪ねた。アトリエを訪ねるのは初めてであったが、天井が高く、まさに居心地のいい空間である。画家がこのアトリエでゆったりと充実した時間を過ごしている情景が浮かんでくる。岡谷の冬は厳しく、寒さのため筆洗が凍る。東京から来る客は、「風邪を引いて帰る」のだそうだ。

根岸芳郎は、1951年にこの地に生まれている。今回訪ねたアトリエは、母家に隣接して19年ほど前に建てたものである。69年に長野県立諏訪清陵高等学校を卒業し、武蔵野美術大学の油絵専攻に入学する。「高校のときのほうが自由にやっていた。今から思うと、好きな物をつくって、現代美術をやっていた」という。実技では麻生三郎らの指導を受け、デッサンや静物を描いていたいっぽう、また藤枝晃雄に依頼して仲間と「現代美術ゼミ」を始めた。しかし「紛争があって、実質2年くらいしか行っていないです」。時代はまさに学

90-11-15　1990　キャンバスにアクリル絵具　170×225cm　東京都現代美術館蔵

1990　「コスモビジョン＝宇宙観的なものに関心をもち、この前年から階段状の形態を描きはじめました。ストロークと絵の構造が一致していきました」

園紛争の真っ只中であり、激しく動いていたのである。73年3月に大学を卒業、半年後に渡米し、翌年2月、ボストン美術館付属美術学校に入学する。遠縁の親戚がボストンにいたためだが、ニューヨークに近いこともあり、「そこに行ってからまた考えよう」と思って、ボストンを選んだという。自己責任を重んじ、生徒個人に合ったアドバイスをするアメリカの教育方法は、日本とはまったく異なり、「ふたつの美術学校を出たというよりは、まったくシステムの違う学校を体験」したのである。

　76年に同校を卒業し、さらに翌77年には研修課程を修了。その後、帰国まで通算6年あまりをボストンで過ごすこととなる。ボストンでの学生時代にアクリル絵具を使用するようになった。「上の世代、特に油絵を描いていた人がインスタレーションに展開するというケースが多かった」し、根岸も「武蔵美時代にはいろいろとやった」が、ボストン以降、一貫して水溶性のアクリル絵具を駆使した平面作品を制作している。それは「体質に合ったから」としか説明することができないが、「これからも変えるつもりはない」という。

　根岸芳郎にとって、ボストンの学生時代に水性アクリル絵具に出合ったことは決定的であっただろう。当初は、水溶性でありながら油絵具のような質感が描けるという程度であったアクリル絵具が、70年代初頭には整備され、表現のメディアとして定着しはじめていた時期である。根岸は、「家の外壁でも、ペンキで塗るというよりも物質で覆っている感じ」のアメリカで、ポロックや初期のステラなどのような、絵具という「物質と対決している」姿勢ではなく、「ア

84-8-4　1984　キャンバスにアクリル絵具
180×232cm　個人蔵

2006

「色の水のなかに現れる、時間と空間の生成や変化の瞬間を切り取って作品化しようとしています」

6-2-24　2006　キャンバスにアクリル絵具　作家蔵
208×160cm　*

クリル系の〈ヘレン・フランケンサーラー〉や〈モーリス・ルイス〉は体質的に合った」と語る。「油絵具で硬く表面を覆う感覚」に馴染めなくなっていた根岸にとって、水溶性のアクリル絵具は、まさに「水と刷毛（はけ）の感触がしっくりした」のである。しかし、当初はまだ、綿のキャンバスにさまざまな色彩が溶け込んでいくような、現在の根岸芳郎の作風が確立されていたわけではない。

そのままアメリカに居ることも考えたが、79年に帰国。翌年には「Art Today'80 絵画の問題」展（西武美術館）、「第16回 今日の作家展――感情と構成」（横浜市民ギャラリー）に選出される。まだ30歳直前という時期である。いわゆる「もの派」より後の世代である根岸芳郎は、立体やインスタレーション全盛という状況のなかで、絵画あるいは平面の問題を再考するという新しい問題意識を体現する作家のひとりとして注目されたわけである。このころ根岸は、モノクロームで微妙な色彩を使用して、抑制された構成的な作品を制作している。制作方法も、キャンバスに地塗りした部分としていない部分を区別したり、マスキングをして色を塗った作品もあり、たとえば「家を建てているときのように」、あらかじめ意図した設計図にしたがって作品をつくっているような感じであった。「『絵画の問題』展の後、絵が変わった。そのあたりは必死だった」とも、また「今やっていることをそのまま展覧会に出している感じだった」とも語るように、当時は悪戦苦闘の日々であっただろう。しかし81年ごろから、より「ペインタリー」になった」し、「描いている感じやストロークと、絵の構造が関連しはじめ」た実感をもつことができるようになる。82年には「第12回パリ青年ビエンナーレ」に選出され、翌83年に初めて個展を開催する。下塗りしない綿キャンバスに水溶性アクリル絵具を染み込ませていくという方法が確立するのは、このころからである。

制作前にあった意図にしたがって絵をつくっていくというのではなく、「ひとつの絵のなかにあるいろんな可能性のなかからどれを選ぶか」、また「なにかわからないけど、ここにこ

93-9-14　1993　キャンバスにアクリル絵具　265×250cm　作家蔵

ねぎし・よしろう　1951年長野生まれ。73年武蔵野美術大学造形学部美術科油絵専攻卒業後、ボストンへ留学。76年ボストン美術館付属美術学校卒業、77年同校研修課程修了。個展に、83年梁画廊（京都）および鎌倉画廊（東京）、89年AD&Aギャラリー（大阪。92年、2001年も）、ギャラリー山口（東京。98年、00年、02年も）、96年シテ・デ・ザール（パリ）ほか。グループ展に、80年「Art Today '80　絵画の問題」展（西武美術館、東京）、82年「第12回パリ青年ビエンナーレ」（パリ市立近代美術館、フランス）、86年「シガ・アニュアル'86――多義的な表面」（滋賀県立近代美術館）、87年「第18回現代日本美術展・企画部門『現代絵画の展望―平面と空間』」（東京都美術館）、「絵画1977-1987　開館10周年記念」（国立国際美術館、大阪）、89年「'89　つかしんアニュアル『浮遊体―イマージュ空間』」（つかしんホール、兵庫）、90年「ファルマコン'90――幕張メッセ現代の美術展」（日本コンベンションセンター、幕張メッセ、千葉）、91年「色相の詩学展」（川崎市市民ミュージアム、神奈川）、95年「現代美術への視点　絵画、唯一なるもの」（東京国立近代美術館。96年に京都国立近代美術館に巡回）、00年「日本美術の20世紀　美術が語るこの100年展」（東京都現代美術館）、03年「現代日本の水彩表現」（渋谷区立松濤美術館、東京）、04年「再考近代日本の絵画」（東京都現代美術館）ほか。作家サイト
http://negishi.bpro.jp/

アトリエで。10数年前にパリで入手したセルマーのテナーサックスをブロウする。学生時代からJAZZに親しんできた。音を出すのは気分転換に過ぎないが、「一瞬を捉えると同時に、連続したバランスを探していくのは、絵を描くことと似ている」[＊]

の色が欲しいというように」色を置きながら思考し、ストロークの痕を見つめながら制作を続けるというような「内在的」な方法に変わったのである。したがって、「自分のリアリティーを感じなくなったら別に行く」と自ら語るように、同じ方法によりながらも、根岸芳郎の画面の特質は大きく変貌していく。89年から90年ごろには、階段状の形態が登場し、それ以後も明確なストロークが出てきたり、色のかたまりが強くなったり、と変化しつづけている。

　キャンバスを床に水平に置いて制作する根岸は、このような制作方法について、「全体を見て判断するというよりも、自分のいる位置でなにをやっているかわからなくなる」が、そこが面白いという。ポロックの「絵のなかにいる」という言葉を思い出すが、根岸も同じように「絵のなかにいることは心地いい」と語るのである。彼の作品の色彩は、画面から前に突出してくるのではなく、むしろ奥に沈んでいくように見える。そこには、いわゆる主張とか自己表現といった明確な自意識は存在しないように見えるのだ。根岸は、「自己表現、個性の表現と教えられたが、それは描いていく途上で、むしろ意識の外側に発見される美の醸成」であると語る。水溶性の絵具であるため、水が乾くと色の質感が変わってくる。ひとつ作業をすると乾くまで待って、つぎの作業にかかる。描き直しや塗り重ねが比較的容易な油彩と異なり、水溶性の絵具では「プロセスが大切」であるため、制作中の絵を見ている時間が多いことになる。

　作業を積み重ね、画面の変貌を見つめながら根岸が作品にしたいと思うことは、「見えるもので見えないものを予感させるような」ものであり、「言葉ではなく、視覚や感性で近づいていくこと」でしか実感することのできないような、生成や変化の緊張感に満ちた瞬間である。色彩によって時間の堆積を見つめようとする根岸芳郎のアトリエには、ゆったりとした時間が流れていた。

◎よこやま・かつひこ＝練馬区立美術館主任学芸員
5月16日、長野・岡谷の作家アトリエにて取材